

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：21301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23593382

研究課題名(和文) 前向きコホート研究による要介護高齢者との死別が家族介護者の健康へ及ぼす影響の解明

研究課題名(英文) Effects of health status of the caregiver on the loss of elderly using prospective cohort study

研究代表者

桂 晶子 (Katsura, Shoko)

宮城大学・看護学部・准教授

研究者番号：00272063

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在宅要介護高齢者との死別が家族介護者の健康とQOLに及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、前向き調査を行った。在宅要介護者の主介護者476人にベースライン調査を実施し、その1年後と3年後に追跡調査を2度実施した。第2回目の追跡調査の回答者は197人であった。このうち、要介護高齢者の介護を続けていた人は72人、死別により介護を終えた人は93人であった。

介護を終えた93人について、疲労、うつ、QOLをベースライン調査時点(介護実施中)と第2回追跡調査時点(介護終了後)で比較した結果、介護終了後は、疲労とうつ得点が有意に低下すること、QOL得点は有意に上昇することが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In this study, we carried out the prospective cohort study in order to elucidate effects of the health and QOL of caregiver on the loss of elderly. We took the baseline survey about 476 family members who take care of the elderly requiring nursing care at home, and carried out two follow-up surveys a year later, and three years later. At the second follow-up survey, we took 197 respondents, which include 72 of an on-going home care and 93 of terminated the home care because of the loss of family.

For the 93 respondents who terminated the home care, we clarified the significant decline of fatigue and the degree of depression, and the significant increase of the QOL.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：要介護高齢者 介護者 在宅介護 死別

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では人口構造が少産多死へと向かうなか、高齢者人口および高齢化率は伸び続けている。これと同時に、在宅において医療や介護を必要とする高齢者も増加している。

要介護高齢者の支援においては、政府による介護サービスの基盤強化が図られてはいるが、高齢者が在宅療養するうえで家族の存在は今なお重要であり、今後は、在宅で高齢者を介護したのち、その高齢者を看取る遺族介護者も増加する可能性がある。また、家族単位の縮小と核家族化の進展は、一人の家族員に係る介護負担の増大をもたらしている。そのため、要介護高齢者と介護者の健康や QOL だけではなく、介護を終えた後の介護者の健康や QOL をも見据えた在宅介護支援を考える必要がある。

介護者の健康状態については介護実施中、および介護終了後においても数多くの研究が蓄積されてきた。しかし、わが国の介護者研究は横断研究が中心であり、一時点の介護者の状況を把握している研究が多い。よって、介護者の健康状態の経過を縦断的に把握し、より詳細な分析が必要である。また、介護の終了が介護者の健康に及ぼす影響を明らかにし、介護終了後の介護者支援についても検討することが重要である。

そこで本研究は、全 3 回の前向き調査により、介護者の健康状態および QOL の実態とその経過、および、介護の終了が介護者の健康と QOL に及ぼす影響を明らかにする。

## 2. 研究の目的

在宅で要介護高齢者を介護している家族のなかの主介護者（以下、介護者とする）を対象とし、介護実施中の介護者の状態を追跡観察することにより、介護者の健康状態および QOL の実態とその経過を明らかにする。

また、研究期間中に介護が終了（被介護者の死亡や施設入所など）した人の分析を通して、介護の終了が介護者の健康と QOL に及ぼす影響を明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究デザイン

量的研究で、記名式自己記入式調査票を用いた前向き縦断調査を実施した。調査は全 3 回とし、1 年目にベースライン調査、2 年目に第 1 回追跡調査、4 年目に第 2 回追跡調査を実施した。

### (2) 研究対象

在宅で要介護者を介護している家族のなかの主介護者を対象とした。

### (3) 縦断調査の具体的方法

#### ベースライン調査（平成 24 年）

調査対象は、在宅で要介護者を介護している家族のなかの主介護者とし、476 人に調査票を配布した。

主な調査内容は、介護者および被介護者の属性と介護状況（年齢、性別、家族構成、介護期間など）、介護者の健康および社会的特性（主観的健康観、外出頻度、趣味や生きがいの有無、うつ、疲労、QOL、ソーシャルサポートなど）とした。

#### 第 1 回追跡調査（平成 25 年）

ベースライン調査の約 1 年後に第 1 回追跡調査を実施した。対象は、ベースライン調査の回答者とし、338 人に調査票を郵送した。

調査内容は、ベースライン調査の調査項目を踏襲し、更に、介護継続の有無と介護終了の場合は介護終了の理由（施設入所、死別など）を把握した。

#### 第 2 回追跡調査（平成 27 年）

ベースライン調査の約 3 年後に第 2 回追跡調査を実施した。対象は、第 1 回追跡調査の回答者とし、234 人に調査票を郵送した。調査内容は、第 1 回追跡調査と同様の項目とした。

### (4) 倫理的配慮

宮城大学看護学部・看護学研究科倫理委員会の承認を得た（承認番号 2011008：平成 23 年 10 月 18 日）。なお、倫理的配慮として、研究対象者および研究協力機関に対し、人権の擁護、尊厳及び自由意志の尊重、プライバシーおよび個人情報の保護、研究内容・方法を適切に理解できるための配慮、研究への参加・協力に伴う利益・不利益への配慮を行った。また、研究に同意し調査が始まってからでも、「調査協力の撤回書」の葉書または研究者への連絡により追跡調査への協力撤回

とデータ消去をすることができる権利を保障し、調査後であっても申し出があれば速やかにデータを消去・破棄した。

#### 4. 研究成果

##### (1) ベースライン調査の結果概要

回答者（介護者）は計 345 人（回収率 72.5%）で、性別は男性 65 人（18.8%）、女性 280 人（81.2%）、平均年齢は 64.4±11.6 歳であった。平均介護期間は 5.3±5.7 年で、1 日の平均介護時間は 9.4±8.4 時間であった。介護者の主観的健康は、「とても健康」25 人（7.2%）、「まあ健康」211 人（61.2%）、「あまり健康でない」94 人（27.2%）、「全く健康でない」13 人（3.8%）、無回答 2 人（0.6%）であった。

被介護者の性別は男性 151 人（43.8%）、女性 194 人（56.2%）、平均年齢は 80.2±13.7 歳であった。

##### (2) 第 1 回追跡調査の結果概要

回答者（介護者）は計 242 人（回収率 71.6%）で、性別は男性 48 人（19.8%）、女性 194 人（80.2%）、平均年齢は 65.6±11.3 歳であった。主観的健康は、「とても健康」14 人（5.8%）、「まあ健康」151 人（62.4%）、「あまり健康でない」63 人（26.0%）、「全く健康でない」11 人（4.5%）、無回答 3 人（1.2%）であった。

介護継続の有無は、介護継続中の者 167 人（69.0%）、介護をしていない者 75 人（31.0%）であった。

##### (3) 第 2 回追跡調査の結果概要

回答者（介護者）は計 197 人（回収率 84.2%）で、性別は男性 38 人（19.3%）、女性 159 人（80.7%）、平均年齢は 67.8±10.4 歳であった。主観的健康は、「とても健康」18 人（9.1%）、「まあ健康」109 人（55.3%）、「あまり健康でない」62 人（31.5%）、「全く健康でない」7 人（3.6%）、無回答 1 人（0.5%）であった。

介護継続の有無は、介護継続中の者 92 人（46.7%）、介護をしていない者 105 人（53.3%）であり、その理由は、被介護者との死別が 95 人、被介護者の施設入所 8 人、その他の理由 1 人、無回答 1 人であった。

##### (4) 要介護高齢者との死別が介護者の健康に及ぼす影響

ベースライン調査時点で 65 歳以上の被介護者の介護を行い、第 2 回追跡調査時点では被介護者との死別により介護を終えていた介護者は 93 人であった。この 93 人について、ベースライン調査時点と第 2 回追跡調査時点でのうつ、疲労、QOL を比較した。その結果、介護中よりも介護終了後の方が、うつ ( $t(82), p=.000$ ) および、疲労 ( $t(89), p=.000$ ) の得点が有意に低かった。また、QOL は身体的領域 ( $t(89), p=.002$ )、心理的領域 ( $t(89), p=.004$ )、社会的関係 ( $t(89), p=.027$ )、QOL 全体 ( $t(89), p=.001$ ) の何れにおいても介護終了後の方が有意に QOL 得点が高かった。

一方、ベースライン調査時点で 65 歳以上の被介護者の介護を行い、第 2 回追跡調査時点でも継続して介護を行っていた者は 72 人であり、この 72 人についても、ベースライン調査時点と第 2 回追跡調査時点でのうつ、疲労、QOL を比較した。その結果、うつは第 2 回追跡調査時点の方がベースライン調査時点よりも有意に得点が高かった ( $t(63), p=.022$ )、疲労は有意差が見られなかった。QOL は身体的領域 ( $t(70), p=.000$ ) と社会的関係 ( $t(70), p=.024$ ) において有意差が認められ、何れも第 2 回追跡調査時点の方が低かった。

以上より、在宅で高齢の家族の介護を行い、死別によって介護を終えた介護者のうつや疲労は、介護を行っていた時よりも良好な状態となり、また、QOL は高まることが示唆された。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

Shoko Katsura, Jun Hagihara, Haruo Nagasawa : Fatigue experienced by family members who take care of the elderly requiring nursing care at home. 3rd World Academy of Nursing Science, 2013 年 10 月 18 日, Seoul. Korea.

Jun Hagihara, Shoko Katsura, Haruo Nagasawa: Effects of Living Behaviors

on Quality of Life of Home Care  
Worker.3rd World Academy of Nursing  
Science, 2013 年 10 月 18 日, Seoul.  
Korea.

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

桂 晶子 (KATSURA Shoko)

宮城大学・看護学部看護学科・准教授

研究者番号 : 00272063

### (2)研究分担者

長澤 治夫 (NAGASAWA Haruo)

宮城大学・看護学部看護学科・教授

研究者番号 : 30295381

萩原 潤 (HAGIHARA Jun)

宮城大学・看護学部看護学科・准教授

研究者番号 : 91347203